講評

ノンフィクションライター　最相葉月

足を運んで、見て、聞いて、感じたことを書いている作品はやはり強いものです。小学生は非常に面白い作品が並びました。

最優秀賞に輝いた三和さんの「明石うらぎょきょうのたんけん」は、一行目を読んだときから音が聞こえてきて、漁協の活気ある様子や人々の動きが目に浮かびました。驚きと好奇心を持って取材し、一生懸命観察して、知らないことをインタビューしています。買い物して、魚を食べるところまで物語になっていて、命をいただく尊さも伝わってきました。1年生で15枚もの作品を、自分の字で書いていることも素晴らしかったです。

優秀賞は、視点のいい作品が選ばれました。生まれつき目が見えないけれど色を感じることができる向井さんの「海の色」は、一篇の詩のようで、私たちと彼女が見ている色は同じなのか違うのか、不思議に思うと同時に、大変刺激的でした。中林さんの「貝がら大そうどう」は、びっくり仰天したことがリアルに表現されていて、その後ヤドカリの生態を丁寧に調べて書いています。新しい知識を得ていく喜びも、ノンフィクションの魅力ですね。高橋さんの「魚を三枚におろした」は、1時間ほどの短い体験をリズムよく文章にしていて、特別な体験ではなくても書けるという手本になるような作品です。

入賞4作品も、個性と工夫が光っていました。細かいところに入り込んだ書き

方がとてもよかったり、豊富なアイデアを提案していたり、光景が目に浮かんで温かな気持ちになったり、関心を持ったことを専門家に記者のように取材していたり。どれも読み応えがありました。

一方で、中学生の作品は、文章を書くというところから大きな課題があると感じました。自分がどう思ったかは、今までに見たり聞いたりした範囲にとどまり、机の上で書いているだけでは非常に狭いものです。ノンフィクションの素晴らしさは、これまで知らなかったことを知り、体験し、人と会い、話を聞いて、その面白さが表現されるところにあります。そういうことから知ってもらいたいと願っています。

今回は残念ながら、最優秀賞は該当なしとなりました。優秀賞となった岸田さんの「アカウミガメの故郷、明石」は、自然の尊さを鮮明に覚えているからこそ、美しい表現になっています。もう一歩踏み込んで取材をしていたら、ぐんと良い作品になるだろうと感じました。入賞には、原稿がしっかり書けている、いい題材を選べたなど、素質が感じられる作品が入りました。

面白いと思ってテーマを見つけることをきっかけに、ノンフィクションは生まれます。今回、目立ってＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）関係が多かったですが、みんながいいと思うことは誰も反論せず、面白みがありません。机の前に座ったまま美辞麗句を並べるのではなく、むしろ、異を唱えるといった感情を大切

にしてください。

第1回の開催となった「こども海の文学賞」。題材である「海」にまつわるテーマは、無尽蔵にいっぱいあります。例えば、船について考えてみただけでも、どんな人たちが乗っているのだろう、中でどんな物を食べているのだろう、どこから来たのだろう、船員になるにはどういう方法があるのだろう・・・などと、知りたいことが湧き出てきます。これが面白いと思ったところから、取材や調査を始めてみてください。いろんな海のノンフィクションを楽しみにしています。